經濟學における計量的方法と歷史的方法

——アメリカ經濟成長論のための序說——

小　原　敬　士

1

モーリス・ドッブ Maurice Dobb は，その *Political Economy and Capitalism*, 2nd ed., 1940 において，經濟學の研究方法に「現實の狀況の中に，いついかなる場合にも存在する若干の〔非本質的な〕特徵を排除することによって抽象を樹立する方法」と「狀況の中のどの特徵が本質的であって，どの特徵が非本質的であるかという事實上の證據には立脚せずに，單純に一揃いの，異質的な諸狀況に共通な性質を結合してアナロジーによる抽象を打ち立てる方法」と，2つの方法があることを指摘し，古典學派やカール・マルクスの用いた抽象はそのうちの前者の型のものであり，ジョン・スチュアート・ミルによって代表される俗流經濟學者や新古典學派の方法は後者の型のものであるといっている。

ごく大まかにいうならば，現在の經濟學的研究において，ドッブのいうような2つの方法論的對立があることは疑うことができないが，そのような2つの方法はまた經濟學における歷史的方法と計量的方法の區別にも對應するものである。現實の中から非本質的なものを投げすて，本質的なものをつかみ出して抽象を樹立することは，鋭い歷史意識をもって經濟の現實をみることによって初めて可能となることである。從來，マルクス主義の經濟學は獨特の歷史哲學を基礎としてそのような本質把握を試みてきた。それに反して本質的，非本質的の問題に拘泥することなく，異質的な狀況に共通な性質を結合し，アナロジーによって抽象を打ち立てることは，なんらかの共通の尺度をもってする經濟量の計測を前提として初めて成立することである。いわゆる不變價格によるケインズ的所得分析や計量經濟學はもっぱらそのような方法によって，經濟現象の量的把握を行ってきた。

それでは，經濟學におけるこのような2つの方法のうち，いずれのものがより正しい方法であろうか。それは，簡單にはいい切れない問題であるし，第1，そのように問うこと自體が必ずしも妥當な問い方ではない。そのような經濟學における2つの方法は互いに矛盾し對立すべきものではなく，むしろ互いに相補うべきものであるからである。殊に，日本經濟，アメリカ經濟といったような具體的な經濟現象の把握のためには，そのような2つの接近方法の協力が要請される。そのような經濟の具體的な姿は，シュムペーターのいわゆる「歷史的，統計的並びに理論的分析の總合」によって初めて適確に把束されるのであり，そのためには歷史的本質觀照と計量的分析とが2つとも要求されるのである。最近，歐米の經濟學界において，經濟の歷史的研究と理論的分析との間に，相互的浸透乃至は接近の傾向が現われてきていることは決して偶然ではない。殊に，經濟成長 (economic growth) の問題に關して，2つの方法の間に接近と協力の傾向が現われていることは興味あることである。

2

經濟發展 (economic development) もしくは經濟成長 (economic growth) の現象はもちろん，上述の2つの方法の兩方の側からこれに接近することができるし，また事實，接近されてきた。

經濟の發展乃至は成長を1つの歷史過程としてとらえ，その現實の發展乃至は成長の經過をその具體的歷史的諸條件にかかわらしめて理解しようとしたのは，もちろん社會經濟史學である。アメリカの場合においては，E. L. Bogart, W. Bowden, H. J. Carman, R. T. Ely, H. U. Faulkner, N. S. B. Gras. L. M. Hacker, W. W. Jennings, I. Lippincott, A. M. Simons, F. A. Shannon, H. F. Williamson, C. W. Wright など多くの學者がほぼ傳統的な歷史記述の方法により，ときには，W. Sombart や Max Weber の方法をとり入れながら，アメリカ經濟の發展過程を歷史的に追跡する仕事をつづけてきた。しかしながら，それらの仕事の多くは，あるいは政治史の經濟的側面の記述であり，あるいは文化史の一部分としての經濟史であって，經濟の發展と成長の過程を經濟それ自體の論理と法則に卽して探求し，分析したものは少なかった。彼らは，資本形成，物價變動，景氣循環などの經濟現象を資本主義の運動法則の表われとして理解することを怠った。つまり經濟史は經濟學からかけ離れたところで仕事をしていたのである。しかしながら，最近においては，經濟史學者の間に，このような事態に對する反省がわき起り，經濟史と經濟學との接近乃至は協働の傾向が强まってきたことは注目に價することである。

このような新しい傾向を代表する學者の1人はイギリスの經濟史家アシュトン T. S. Ashton 教授である。彼は F. A. Hayek ed., *Capitalism and the Historians*, 1954 に寄せた論文において，經濟史の研究が經濟理論によって導かれねばならないことを主張して次のようにいっている。

「もしも19世紀の經濟發展に關する通說に對する私の第1の異議がその悲觀論についてであるとするならば，第2の異論は，それらの見解が經濟的感覺のいかなる微光の照射をもうけていないということである。」[1]

アシュトンの見解によれば，アダム・スミスとその直接の後繼者たちの時代においては，商業，工業，貨幣，財政，人口，貧困などの歷史をとり扱った多くの論文が現われた。その執筆者である Anderson, Macpherson, Chalmers, Colquhoun, Lord Liverpool, Sinclair, Eden, Malthus, Tooke などは，自分自身が經濟學者であるか，それでなくとも少くともスミス，リカードー，ミルなどが關心をもっていた事柄について興味をいだくような人人であった。そこには歷史と理論との間にそれほどはっきりした懸隔はなかった。ところが19世紀の後半においては大きな罅隙が現われた。その傾向は經濟用語以外の言葉で歷史をかくことであった。"Industrial Revolution" という言葉も——Miss Bezanson が證明したように——最初はイギリスの產業資本家や經濟學者によって用いられたのではなく，18世紀末のフランスの學者によって，フランス革命との類比において用いられたものであった。「經濟史家は2世紀にわたり，經濟問題を等閑にするか，それでなければ，それを表面的にとり扱った」とアシュトンはいう。

「少くともケインズ以前においては，經濟理論家は抽象の世界に活動していて，歷史家に提供する價値があるものを少しももっていなかった，ということがしばしばいわれている。しかし，もしも歷史家が少しでも限界分析を考えたならば，彼らは，貿易は餘剩がある場合にのみ起りうるとか，對外投資は國內の資本市場が飽和狀態となったときにのみ起るといったような愚かしい主張から救われたことであろう。經濟理論の要素を無視することは，歷史家をして，あらゆる好都合な傾向に對して政治的解釋を與える結果となった。きわめて多くの書物において，19世紀の勞働條件の改善は工場法のおかげであるとされている。男子の勞働の生產性の向上が，工場において搾取されていた子供の數や，鑛山で墮落していた女子の數の減少と關係があることを指摘したものはほとんどない。ロストウ Rostow 教授が1948年に British Economy of the Nineteenth Century に關する著書を著わすまでは，投資と所得に關する歷史家による論議はほとんどみられなかった。」[2]

これによっても判るように最近のアシュトンは，經濟史の研究における經濟理論的分析の必要を强調するのであり，そのために彼はいわゆる經濟發展の段階理論 (Stufentheorie) をきびしく批判している。彼の見解によれば，從來の社會經濟史學においては，しばしば商業資本主義，產業資本主義，金融資本主義，國家資本主義の段階理論が採用されていたが，「このようなやり方で經濟史を敎えること，すなわち，商業，工業，金融及び國家統制が繼起的 (successive) な支配力であることを示唆することは，あらゆる時代におけるこれらのすべてのものの相互作用と相互關係を學生の眼からかくす結果となると私は思う。それは惡しき經濟學 (bad economics) である。」[3]

アメリカにおいてこれとほぼ同じような立場において經濟史的研究を行なおうとしているのは周知のようにマサチューセッツ工科大學の準敎授ロストウ W. W. Rostow である。彼は，19世紀中葉以後の世界經濟の發展過程の究明を企てるに當って，ハーロッド R. F. Harrod その他の近代經濟學者によって提出された經濟成長率 (rate of economic growth) の概念がきわめて有用であることを主張して次のようにいう。

「このような理論的要具が歷史學の研究と敎授の中から起源しているということは，それが1つの論理的構造として含むかもしれない不十分さの言い譯にはならない。またそれが1人の經濟史の敎師にとって役に立つと信ぜられることは，一般的な說得力と應用性を保證させるものではない。にもかかわらず，それは意見が一致した一群の事實からあまり隔っていないところで發生したひとつの理論的分析である。そして，その目的はさらにすすんだ經驗的調査を行うことを助けることである」[4]。

同じくアメリカの經濟史學者であるアッシャー A. P. Usher 教授も，「歷史的，統計的並びに理論的分析をひとつの包括的說明の中に總合」しようとしたシュムペーターの業績を高く評價することによって，經濟史研究に

1) F. A. Hayek, *Capitalism and the Historians*, 1954, *p.* 53.

2) F. A. Hayek *ibid.*, p. 57.

3) F. A. Hayek, *ibid.*, p. 59.

4) W. W. Rostow, *The Process of Economic Growth*, 1952, p. 2—3.

おける理論的分析を尊重しようとする態度を示している。晩年のシュムペーターの經濟學研究における基本的立場は，周知のように，『景氣循環論』第1巻にかかれた次のような言葉によって最も明瞭に示されている。

「われわれが理解しようと試みていることは，歴史的時期における經濟變化であるから，窮極の目標は單に恐慌の歴史もしくは循環乃至波動の歴史のみでなく，あらゆる様相と關連における經濟過程の合理化された（概念的に解明された）歴史に外ならないと言っても過言ではない。このような經濟過程の歴史に對して，理論は單に若干の道具と圖式を與えるだけであり，統計は一部の素材を與えるだけである。詳細な歴史的知識だけが個々の因果關係や機構の問題の大部分に決定的に答えうるのであり，それがなければ時系列の研究は結論が出ないし，理論的分析は空虛なものとなることは明らかである。」[5]

アッシヤーはシュムペーターのこのような基本的態度が彼の多くの著作の中に具體化せられ，多くの新しい發見と解釋を生み出していることを指摘して次のようにいうのである。

「『經濟發展の理論』はその最も抽象的な定式化においてさえ，經濟史の解釋における新しい展望を開いた。『景氣循環論』にまで擴張されると，その理論のこれらのあらゆる特徴がますます明瞭となった。發見時代以降のヨーロッパ經濟史の解釋の大規模な修正ほど問題であるものはない。多くのきわめて重要な新判斷が歴史的部分の最初の30ページに示されているが，しかし，きわめて重要な歴史的素材が，『景氣循環論』の全巻にわたって，またその後の著作は『資本主義，社會主義及び民主主義』を通じて至るところに散らばっている。經濟史のこれらの修正を完全に蒐集することは多くの經濟學者にとって永い年月を必要とするであろう。」[6]

3

一方經濟理論の側においては，國民生產額乃至は國民所得の長期的增加率，すなわち經濟成長率（rate of economic growth）の概念を基準として，一國の經濟發展のテンポと程度とを計測し，さらに，それを手掛りとして，そのような成長の速度や形態を規定した諸要因を究明しようとする試みが行われている。その場合において問題となっているのは，ハーロッドの成長理論によって典型的に示されているように，自然條件，政治的出來事，戰爭，恐慌といったような經濟變動の外生的要因をすべて捨象し，貯蓄率，資本係數，國民所得などの單純な集計概念を用いて，內生的要因にもとづく經濟成長のモデルをつくり上げることであって，したがってそれは，個個の具體的事實を基礎として經濟發展の歴史過程を究明しようとする固有の意味の社會經濟史學とは，全く別個の方法によるものであった。しかしながら，このような理論は單純化された諸概念を基礎として經濟成長の內生的諸要因とその相互關連を究明することには役立ったけれども，しかし，それによって現實の經濟成長過程を說明することは，もともとできない相談であった。この點は，例えば，成長理論の代表的研究者の1人であるドーマーによって，十分に明確に指摘されている。彼はいう。

「經濟成長はある社會の本質そのものによって決定される。したがって包括的な成長理論は，ほんの僅かなものをあげるだけでも，自然環境，政治構造，誘因，教育方法，法制的外圍，科學に對する・變動に對する・蓄積に對する態度などを含むべきものである。〔しかし〕それらのものは，いずれも適當に獨立變數とみなすことはできない。したがって，必要な同時函數の體系は，記號であらわすにしても言葉で示すにしても，不可能といってもよいほど複雜となるであろうし，またおそらく役に立たないものとなるであろう。それゆえに，この問題の取り扱いは，2つの，むしろ鋭く異っている部分に分れる。つまり，一般的論述と，高度に單純化された記號的モデルとであり，その間には廣い罅隙がある。いずれの接近もそれ自體としては滿足なものではない。前者は分析を缺いているのがつねであり，後者はあまりにも狹く，またがっかりするほど正確である。兩者ともひとつの橋の兩端とみるべきであり，その橋ができ上れば，いかに眞に役に立つ成長理論が與えられるであろう。しかし，各自が自分の端から出發するからといって，それは問題全體の理解を缺いているものとは限らない。たとえ，われわれが，可能なあらゆる機會に，われわれの方法の限界を自覺しなくてもである。」[7]

成長理論は經濟の發展過程を問題とするけれども，それは歴史學ではない。成長理論の世界は，時の流れはあ

5) J. Schumpeter, *Business Cycles*, 1939, Vol. 1. p. 220.

6) A. P. Usher, "Historical Implications of the Theory of Economic Development". *The Review of Economics and Statistics*, Vol. XXXIII, 1951, p. 161.

7) Evsey D. Domar, "Economic Growth: An Econometric Approach", *The American Economic Review*, Vol. XLII, No. 2, May 1952, p. 481.

るけれども，歴史をもたない世界である。それはジョーン・ロビンスンがハーロッドの動態經濟學に對する批判において，鋭く指摘している通りである。彼女は次のようにいっている。

「次に，彼〔ハーロッド〕の世界は，時間を通じて不斷の變化が進行しているという意味において動態的であるが，しかし，それは歴史のない世界である。過去において起ったすべての變化は，いわばそれが起ったままに消化された。時間は同質的な流れをつくって移り動く。そしてわれわれがどの時點を覗いても同じことである。それはまた政治のない世界である。そこには，社會の內部における利害の衝突もなく，個人の行動に對する社會的環境の影響もほとんどない。同時にそれは，企業者，金利生活者，勞働者をもち，また貨幣財政制度をもつ資本主義の世界である。」[8]

そのような抽象理論が現實の世界との間に大きな乖離をもち，したがって，それはそのままでは政策樹立の理論的根據となりえないことも，ロビンスンによって明確に指摘されている。

「高度に抽象的な分析の斷片から，その分析の諸前提がどの程度まで現實の狀況の諸事實に適合しているかを檢討する中間の段階を經ずに，いきなり政策の處方に飛躍することは，現在の經濟的論議の共通の罪惡である。ハーロッド氏の3つのG（成長率）についての巧妙かつ啓示的な操作と，現實の經濟の狀態との間には大きな鴻隙がある。

まず第1に，所得と富の分配の節約に對する效果が論議から省かれている。……過度の節約の現象は過度の不均等性の所產であり，不均等性を是正しようとする措置は，それ自體の政治的もしくは人道主義的な長所のために主唱されるかもしれないけれども，その副產物として，狀況を永久に逆轉せしめ，不十分な節約が正常な準則となると論ずることは尤もらしいことであろう。このような大問題を十分に論議するまでは，過剩貯蓄を吸收する人爲的措置を論議してもほとんど意味がないようにみえる。

第2に，われわれはハーロッド氏の世界が，投資必要額をみたす餘地が全くない世界であることに注意しなければならない。そこには修繕すべき戰災もなければ，過去がわれわれの手に殘したがらくたを片づけるためのスラム淸掃や都市の再計畫もない。個人主義的な土壤の搾取によってつくり出された砂地の砂漠の復原もない。殘りの部分の水準にまで引き上げるべき社會の後進部分というものもない。人口過剩地域の工業によって克服さるべき『マルクス的失業』もない。既存の技術的知識に照らしての陳腐化した設備の改善もない。產業設備に具體化さるべき最近の大規模な科學的發見もない。要するにハーロッドの世界はヨーロッパ，アジアもしくはアメリカと混同してはならないのである。」[9]

成長の理論を理念型的に構成することは可能であるし，また必要でもあろう。しかし，アメリカとか日本とかの特定の社會の現實の經濟成長を說明する段になると，そのような抽象理論だけでは必ずしも十分ではないのである。そのような反省が，成長過程の實證的研究に携わっている人々の間に高まってきたことは當然のことと言ってよいであろう。所得分析の方法によってアメリカの經濟成長率を計測する上に大きな貢獻を行っているサイモン・クズネッツもそのような計量的方法の限界について次のようにかいている。

「一般的經濟成長の歴史的變化は，過去から繼承された制度的外枠の內部における能動的社會集團の起動的形態（motivational patterns）を基準として研究されねばならない。……このような觀點からみれば，社會的集合物の統計的な計測と分析の可能的價値は全く限られたものである。けだし，統計の要具は全體としての結果を計測するのに役立つだけであって，人間的要素の基本的な動機や慾望を明らかにすることができないからである。」[10]

この問題に對してクズネッツは必ずしも明確に答えていない。しかしながら，經濟の成長もしくは發展の問題は，少くとも特定の經濟社會に關する限り，理論的分析と歴史的把束との「橋の兩端」から接近することによってはじめてその客觀的認識に到達しうるということは誰しも異論のないところであろう。もちろん，問題は，たとえいかなる方法を用いるとしても，アメリカならアメリカの經濟成長の過程とその特質をいかに明確に把束するかということであるが，そのためには，豐富な事實的知識と，鋭い歴史的ヴィジョンに裏付けられた適確な理論的分析が必要であろう。

---

8) Joan Robinson, *Collected Economic Papers*, 1951, p. 156.

9) *ibid.*, p. 172.

10) S. Kuznets, "Long-Term Changes in the National Income of the United States of America Since 1870," *Income and Wealth*, Series II, 1952, p. 13.